

漱石全集
卷

吾輩は猫である
下

全三十四卷 第十回配本

昭和三十一年十月十二日 第一刷發行◎ 漱石全集 第二卷

定價百五十圓

著者 夏目漱石

發行者 東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地 岩波雄二郎

印刷者 東京都青梅市根ヶ布三八五番地 山田一雄



發行所

東京都千代田區
神田一ツ橋二ノ三
株式會社

岩波書店

落丁本・亂丁本はお取替いたします

精興社印刷・永井製本

こゝろ。まんふ人が世の中に充滿して居る以上は長火
鉢^{（おこし）}以て主人に泥棒根性があると断定する訳でも行
ぬ。もし主人に泥棒根性があるとすれば、天下の人まで
みんな泥棒根性がある。

長火鉢の前後に陣取つて、食卓の前に控へて居る主人の三
面とも、先刻箱中で顔を洗つて坊ばと、作茶の味噌の学校
へ行くと、いふと、作白粉饅頭に指を突き込んで、いふ子が、既
に勢揃をして、^{（餅）}餃子^{（ぎょうざ）}を食つて居る。主人は一應此三世子の
顔を公平に見渡した。とん子の顔は南無鉢の刀の鏢。
根ふ輪廓を有して居る。すん子も妹丈に多少姉の面影
を存して、琉球塗の朱盃位な資格ではある。只坊ばに至つ
ては、鼻彩を放つて、面長に出来上つて居る。但し壁に長い

「吾輩は猫である」原稿の一部

目次

吾輩は猫である 下

解説

二三

注解

二四五

吾輩は猫である 下

明治三九、一、一—三九、八、一、

七

吾輩は近頃運動を始めた。猫の癖に運動なんて利いた風だと一概に冷罵し去る手合てあひに一寸申し聞けるが、さう云ふ人間だつてつい近年迄は運動の何者たるを解せず、食つて寐るのを天職の様に心得て居たではないか。*ふじこれき無事は貴人きじんとか稱とへて、懷手をして座布團ざふだんから腐れかゝつた尻を離さざるを以て旦那の名譽と脂下やにさがつて暮したのは覺えて居る筈だ。運動をしるの、牛乳を飲めの冷水を浴びろの、海の中へ飛び込めの、夏になつたら山の中へ籠つて當分霞を食くらへのとくだらぬ注文を連發する様になつたのは、西洋から神國へ傳染した輓近ばんきんの病氣で、矢張りペスト、肺病、神經衰弱の一族

と心得ていゝ位だ。尤も吾輩は去年生れた許ばかりで、當年とつて一歳だから人間がこんな病氣に罹かり出した當時の有様は記憶に存して居らん、のみならず其礎みそりは浮世かざなの風中にふわついて居らなかつたに相違ないが、猫の一年は人間の十年に懸*け合ふと云つてもよろしい。吾等の壽命は人間より二倍も三倍も短いに係らず、其短日月の間に猫*一疋の發達は十分仕つかまつる所を以て推論すると、人間の年月と猫の星霜を同じ割合に打算するのは甚しき誤謬ごびうである。第一、一歳何ヶ月に足らぬ吾輩が此位の見識を有して居るのも分るだらう。主人の第三女など杯は數へ年で三つださうだが、智識の發達から云ふと、いやはや鈍いものだ。泣く事と、寐小便をする事と、おつぱいを飲む事より外に何にも知らない。世を憂ひ時を憤いきどほる吾輩杯などに較べると、からたわいのない者だ。夫それだから吾輩が運動、海水浴、轉地療養の歴史を方寸のうちに疊み込んで居たつて毫も驚くに足り

ない。是しきの事をもし驚ろく者があつたなら、それは人間と云ふ足の二本足りない野呂間に極つて居る。

人間は昔から野呂間である。であるから近頃に至つて漸々運動の機能を吹聴したり、海水浴の利益を喋々して大發明の様に考へるのである。吾輩は生れない前から其位な事はちゃんと心得て居る。第一海水が何故藥になるかと云へば一寸海岸へ行けばすぐ分る事ぢやないか。あんな廣い所に魚が何疋居るか分らないが、あの魚が一疋も病氣をして醫者にかゝつた試しがない。みんな健全に泳いで居る。病氣をすれば、からだは利かなくなる。死ねば必ず浮く。それだから魚の往生をあがると云つて、鳥の薨去を、落ちると唱へ、人間の寂滅をどねると號して居る。洋行をして印度洋を横斷した人に君、魚の死ぬ所を見たまいますかと聞いて見るがいゝ、誰でもいゝえと答へるに極つて居る。それはさう答へる譯だ。いくら往復したつて一匹も波

の上に今呼吸を引き取つた——呼吸ではいかん、魚の事だから潮を引き取つたと云はなければならん——潮を引き取つて浮いて居るのを見た者はないからだ。あの渺々たる、あの漫々たる、大海を日となく夜となく續け様に石炭を焚いて探がしてあるいても古往今來一匹も魚が上がつて居らん所を以て推論すれば、魚は餘程丈夫なものに違ないと云ふ斷案はすぐに下す事が出来る。それなら何故魚がそんなに丈夫なのかと云へば是亦人間を待つてしかる後に知らざるなりで、譯はない。すぐ分る。全く潮水を呑んで始終海水浴をやつて居るからだ。海水浴の機能はしかく魚に取つて顯著である。魚に取つて顯著である以上は人間に取つても顯著でなくてはならん。一七五〇年にドクトル、リチャード、ラッセルがブライトンの海水に飛込めば四百四病即席全快と大袈裟な廣告を出したのは遅い——と笑つてもよろしい。猫と雖も相當の時機が到着すれば、

みんな鎌倉あたりへ出掛ける積りで居る。但し今はいけない。物には時機がある。御維新前の日本人が海水浴の機能を味はう事が出来ずに死んだ如く、今日の猫は未だ裸體で海の中へ飛び込むべき機會に遭遇して居らん。せいては事を仕損しそずる、今日の様に築地へ打つちやられに行つた猫が無事に歸宅せん間は無暗に飛び込む譯には行かん。進化の法則で吾等猫輩の機能が狂瀾怒濤きやうらんどたうに對して適當の抵抗力を生ずるに至る迄は——換言すれば猫が死んだと云ふ代りに猫が上がつたと云ふ語が一般に使用せらるゝ迄は——容易に海水浴は出来ん。

海水浴は追つて實行する事にして、運動だけ文は取り敢ずやる事に取り極めた。どうも二十世紀の今日運動せんの如何にも貧民の様で人聞きがわるい。運動をせんと、運動せんのではない、運動が出来ないのである、運動をする時間がないのである、餘裕がないのだと鑑

定される。昔は運動したものが折助*せりすけと笑はれた如く、今では運動をせぬ者が下等と見倣みなされて居る。吾人の評價は時と場合に應じ吾輩の眼玉の如く變化する。吾輩の眼玉は只小さくなつたり大きくなつたりする許りだが、人間の品騭*ひんしつとくると眞逆まぎさかさまにひつくり返る。ひつくり返つても差し支つかへはない。物には兩面がある、兩端りやうたんがある。兩端を叩いて黑白の變化を同一物の上に起こす所が人間の融通のきく所である。方寸を逆かさまにして見ると寸方となる所に愛嬌がある。天の橋立を股倉またぐらから覗いて見ると又格別な趣おもむきが出る。セクスピヤも千古萬古セクスピヤではつまらない。偶たまには股倉からハムレットを見て、君こりや駄目だよ位に云ふ者がないと、文界も進歩しないだらう。だから運動をわくる云つた連中が急に運動がしたくなつて、女迄がラケツトを持つて往來をあるき廻つたつて一向不思議はない。只猫が運動するのを利いた風だなどと笑ひさへし

なければよい。さて吾輩の運動は如何なる種類の運動かと不審を抱く者があるかも知れんから一應説明し様と思ふ。御承知の如く不幸にして機械を持つ事が出来ん。だからボールもバットも取り扱ひ方に困窮する。

次には金がないから買ふ譯に行かない。此二つの原因からして吾輩の選んだ運動は一文入らず器械なしと名づくべき種類に屬する者と思ふ。そんなら、のそく歩くか、或は鮪の切身を啣へて馳け出す事と考へるかも知れんが、只四本の足を力學的に運動させて、地球の引力に順つて、大地を横行するのは、あまり單簡で興味がない。いくら運動と名がついても、主人の時々實行する様な、讀んで字の如き運動はどうも運動の神聖を汚がす者だらうと思ふ。勿論只の運動でもある刺激の下にはやらんとは限らん。鯉節競争、鮭探し杯は結構だが是は肝心の対象物があつての上の事で、此刺激を取り去ると索然として沒趣味なものになつて仕舞

ふ。懸賞的興奮劑がないとすれば何か藝のある運動がして見たい。吾輩は色々考へた。臺所の廂から家根に飛び上がる方、家根の天邊にある梅花形の瓦の上に四本足で立つ術、物干竿を渡る事、——是は到底成功しない、竹がつるく滑べつて爪が立たない。後ろから不意に小供に飛びつく事、——是は頗る興味のある運動の一だが滅多にやるとひどい目に逢ふから、高々月に三度位しか試みない。紙袋を頭へかぶせらるゝ事——是は苦しい許りで甚だ興味の乏しい方法である。殊に人間の相手が居らんと成功しないから駄目。次には書物の表紙を爪で引き搔く事、——是は主人に見付かると必ずどやされる危険があるのみならず、割合に手先の器用ばかりで總身の筋肉が働かない。是等は吾輩の所謂舊式運動なる者である。新式のうちには中々趣味の深いがある。第一に蠅螂狩り。——蠅螂狩りは鼠狩り程の大運動でない代りにそれ程の危険がない。

夏の半^{なかば}から秋の始めへかけてやる遊戯としては尤^{もつと}も上乘のものだ。其方法を云ふと先づ庭へ出て、一匹の蠅^{かまきり}をさがし出す。時候がいゝと一匹や二匹見付け出すのは雑作^{ざふさ}もない。諸見^{さて}付け出した蠅^{かまきりくん}君の傍^{そば}へはつと風を切つて馳けて行く。するとすはこそと云ふ身構^{みがまへ}をして鎌首をふり上げる。蠅^{かまきり}でも中々健氣^{けんけい}なもので、相手の力量を知らんうちは抵抗する積りで居るから面白い。振り上げた鎌首を右の前足で一寸參る。振り上げた首は軟かいからぐにやり横へ曲る。此時の蠅^{かまきりくん}君の表情が頗る興味を添へる。おやと云ふ思ひ入れが充分ある。所を一足飛^{いっそく}びに君^{きみ}の後ろへ廻つて今度は背面から君の羽根を輕^{かろ}く引き搔く。あの羽根は平生大事に疊^{かさね}んであるが、引き搔き方が烈しいと、ぱつと亂れて中から吉野紙^{*}の様な薄色の下着があらはれる。君は夏でも御苦勞千萬に二枚重ねで乙^{おつ}に極^きまつて居る。此時君の長い首は必ず後ろに向き直る。ある時は向つてく

るが、大概の場合には首丈^{だけ}ぬつと立てゝ立つて居る。此方^{こつち}から手出しをするのを待ち構へて見える。先方がいつ迄もこの態度で居ては運動にならんから、あまり長くなると又ちよいと一本^{*}參る。これ丈^{だけ}參ると眼識のある蠅^{かまきり}なら必ず逃げ出す。それを我^{わが}無洒落^{むしやら}に向つてくるのは餘程無教育な野蠻的蠅^{かまきり}である。もし相手が此野蠻な振舞をやると、向つて來た所を覘^{ねら}ひすまして、いやと云ふ程張り付けてやる。大概是二三尺飛ばされる者である。然し敵が大人^{おとな}しく背面^{*}に前進すると、こつちは氣の毒だから庭の立木を二三度飛鳥の如く廻つてくる。蠅^{かまきりくん}君はまだ五六寸しか逃げ延びて居らん。もう吾輩の力量を知つたから手向ひをする勇氣はない。只右往左往へ逃げ惑^{まど}ふのみである。然し吾輩も右往左往へ追つかけるから、君は仕舞には苦しがつて羽根を振^{ふる}つて一大活躍を試みる事がある。元來蠅^{かまきり}の羽根は彼の首と調和して、頗る細長く出來上がつたものだが、

聞いて見ると全く裝飾用ださうで、人間の英語、佛語、獨逸語の如く毫も實用にはならん。だから無用の長物を利用して一大活躍を試みた所が吾輩に對して餘り功能のあり様譯がない。名前は活躍だが事實は地面の上を引きずつてあるくと云ふに過ぎん。かうなると少々氣の毒な感はあるが運動の爲だから仕方がない、御免蒙つて忽ち前面へ馳け抜ける。君は情性で急廻轉が出来ないから矢張り已を得ず前進してくる、其鼻をなぐりつける。此時蟬螂君は必ず羽根を廣げた儘仆れる。其上をうんと前足で抑へて少しく休息する。それから又放す。放して置いて又抑へる。七擒七縱孔明の軍略で攻めつける。約三十分此順序を繰り返して、身動きも出来なくなつた所を見済して一寸口へ啣へて振つて見る。それから又吐き出す。今度は地面の上へ寐たぎり動かないから、此方^{こつち}の手で突つ付いて、其勢で飛び上がる所を又抑へつける。これもいやになつてから、

最後の手段としてむしや／＼食つて仕舞ふ。序でだから蟬螂を食つた事のない人に話して置くが、蟬螂はあまり旨い物ではない。さうして滋養分も存外少ない様である。蟬螂狩りに次いで蟬取りと云ふ運動をやる。單に蟬と云つた所が同じ物許りではない。人間にも油野郎、みんな／＼野郎、おしい／＼野郎がある如く、蟬にも油蟬、みんな／＼、おしい／＼がある。油蟬はしつこくて行かん。みんな／＼は横風で困る。只取つて面白いのはおしい／＼である。是は夏の末にならないと出て來ない。八つ口の綻びから秋風が斷はりなしに膚を撫で／＼はつくしよ風邪を引いたと云ふ頃蟣に尾を掉り立て／＼なく。善く鳴く奴で、吾輩から見ると鳴くのと猫にとられるより外に天職がないと思はれる位だ。秋の初はこいつを取る。是を稱して蟬取り運動と云ふ。一寸諸君に話して置くが苟も蟬と名のつく以上は、地面の上に轉がつては居らん。地面の上に

落ちて居るものには必ず蟻がついて居る。吾輩の取るのは此蟻の領分に寐轉んで居る奴ではない。高い木の枝にとまつて、おしいつく／＼と鳴いて居る連中を捕へるのである。是も序だから博學なる人間に聞きたいがあれはおしいつく／＼と鳴くのか、つく／＼おしいと鳴くのか、其解釋次第によつては蟬の研究上少なからざる關係があると思ふ。人間の猫に優る所はこんな所に存するので、人間の自ら誇る點も亦斯様な點にあるのだから、今即答が出来ないならよく考へて置いたらよからう。尤も蟬取り運動上はどつちにしても差支はない。只聲をしろるべに木を上つて行つて、先方が夢中になつて鳴いて居る所をうんと捕へる許りだ。是は尤も簡畧な運動に見えて中々骨の折れる運動である。吾輩は四本の足を有してゐるから大地を行く事に於ては敢て他の動物には劣るとは思はない。少なくとも二本と四本の數學的智識から判斷して見て人間には負け

ない積りである。然し木登りに至つては大分吾輩より巧者な奴が居る。本職の猿は別物として、猿の末孫たる人間にも中々侮るべからざる手合が居る。元來が引力に逆らつての無理な事業だから出来なくても別段の耻辱とは思はんけれども、蟬取り運動上には少なからざる不便を與へる。幸に爪と云ふ利器があるので、どうかかうか登りはするものゝ、はたで見る程樂では御座らん。のみならず蟬は飛ぶものである。蠅螂君と違つて一たび飛んで仕舞つたが最後、折角の木登りも、木登らずと何の擇む所なしと云ふ悲運に際會する事がないとも限らん。最後に時々蟬から小便をかけられる危険がある。あの小便が稍ともすると眼を覗つてしよぐつてくる様だ。逃げるのは仕方がないから、どうか小便許は垂れん様に致したい。飛ぶ間際に溺りを仕るのは一體どう云ふ心理的狀態の生理的器械に及ぼす影響だらう。矢張りせつなさの餘りかしらん。或は敵の

不意に出で、一寸逃げ出す餘裕を作る爲の方便か知らん。さうすると烏賊の墨を吐き、ベランメーの刺物を見せ、主人が羅旬語を弄する類と同じ綱目に入るべき事項となる。是も蟬學上忽かせにすべからざる問題である。充分研究すれば是丈で慥かに博士論文の價值はある。夫は餘事だから、其位にして又本題に歸る。

蟬の尤も集注するのは——集注が可笑しければ集合だが、集合は陳腐だから矢張り集注にする。——蟬の尤も集注するのは青桐である。漢名を梧桐と號するさうだ。所が此青桐は葉が非常に多い、而も其葉は皆團扇位な大きさであるから、彼等が生い重なると枝が丸で見えない位茂つて居る。是が甚だ蟬取り運動の妨害になる。聲はすれども姿は見えずと云ふ俗謡はとくに吾輩の爲に作つた者ではなからうかと怪しまれる位である。吾輩は仕方がないから只聲を知るべに行く。下から一間許りの所で梧桐は注文通り二又になつて居るから、

こゝで一休息して葉裏から蟬の所在地を探偵する。尤もこゝ迄來るうちに、がさ／＼と音を立て、飛び出す氣早な連中が居る。一羽飛ぶともういけない。眞似をする點に於て蟬は人間に劣らぬ位馬鹿である。あから續々飛び出す。漸々二又に到着する時分には滿樹寂として片聲をとゞめざる事がある。嘗てこゝ迄登つて來て、どこをどう見廻はしても、耳をどう振つても蟬氣がないので、出直すのも面倒だから暫く休息しやうと、又の上に陣取つて第二の機會を待ち合せて居たら、いつの間にか眠くなつて、つい黒甜郷裡に遊んだ。おやと思つて眼が醒めたら、二又の黒甜郷裡から庭の敷石の上へどたりと落ちて居た。然し大概是登る度に一つは取つて來る。只興味の薄い事には樹の上で口に啣へて仕舞はなくではならん。だから下へ持つて來て吐き出す時は大方死んで居る。幾らぢやらしても引つ搔いても確然たる手答がない。蟬取りの妙味はぢ

つと忍んで行つておしい君が一生懸命に尻尾を延ばしたり縮ましたりして居る所を、わつと前足で抑へる時にある。此時つく／＼君は悲鳴を揚げて、薄い透明な羽根を縦横無盡に振ふ。其早い事、美事なる事は言語道斷、實に蟬世界の偉觀である。余はつく／＼君を抑へる度にいつでも、つく／＼君に請求して此美術的演藝を見せてもらう。夫がいやになると御免を蒙つて口の内へ頬張つて仕舞ふ。蟬によると口の内へ這入つて迄演藝をつゞけて居るのがある。蟬取りの次にやる運動は松滑りである。是は長くかく必要もないから、一寸述べて置く。松滑りと云ふと松を滑る様に思ふかも知れんが、さうではない矢張り木登りの一種である。只蟬取りは蟬を取る爲に登り、松滑りは、登る事を目的として登る。此が兩者の差である。元來松は常磐にて最明寺の御馳走をしてから以來今日に至る迄、いやに／＼して居る。従つて松の幹程滑らないものは

ない。手懸りのいゝものはない。足懸りのいゝものはない。——換言すれば爪懸りのいゝものはない。その爪懸りのいゝ幹へ一氣呵成に馳け上る。馳け上つて置いて馳け下がる。馳け下がるには二法ある。一はさかさになつて頭を地面へ向けて下りてくる。一は上つた儘の姿勢をくづさずに尾を下にして降りる。人間に問ふがどつちが六づかしいか知つてるか。人間の淺墓な了見では、どうせ降りるのだから下向に馳け下りる方が樂だと思ふだらう。夫が間違つてゐる。君等は義經が嶋越を落としたこと丈を心得て、義經でさへ下を向いて下りるのだから猫なんぞは無論下た向きで澤山だと思ふのだらう。さう輕蔑するものではない。猫の爪はどつちへ向いて生えて居ると思ふ。みんな後ろへ折れて居る。夫だから鳶口のやうに物をかけて引き寄せゐる事は出来るが、逆に押し出す力はない。今吾輩が松の木を勢よく馳け登つたとする。すると吾輩は元來地